

【論文 16】

遊行と僧院の建設とサンガの形成

森 章司

【0】はじめに

[1] 私たちはこの「原始仏教聖典資料による釈尊伝の研究」をテーマとする総合研究において、いわばそのすべてが釈尊の伝記資料ともいうべきパ・漢の原始仏教聖典を時系列にしたがって編集しなおすことによって、釈尊の生涯と釈尊教団の形成史を描き出したいと考えている。そしてそれはただ単なる歴史的事項の羅列だけではなく、釈尊や比丘たちの生活もリアルに再現したものでなければならないとも考えている。

そのためには釈尊とその弟子たちが、毎日を、あるいは1年をどのような周期で、どのように暮らしていたかということをはっきりとすることが必須の条件となる。具体的にいえば、釈尊とその弟子たちの衣食住がどのようなものであり、遊行や雨安居がどのように行われていたのかなどということであるが、これらについての細部はまた別の機会に論じることにして、本稿ではその根底にある生活方法の基本を考えてみることにしたい。ただし遊行については本稿の内容と密接に係わるため、若干詳しくふれた。

[2] ところで本論文の題目は三題噺的なものになったが、それは、日本の学界では、釈尊の生涯の最初期には比丘たちは、当時のジャイナ教徒やアーギーヴァカ教徒など沙門と呼ばれる宗教者たちやバラモン教の遍歴者たちが等しく行っていた一処不住の「遊行」を常として、山谷の洞窟・樹下などに1人で住していたのであったが、やがて「僧院」が建設されると集団的な定住が始まり、それによって「サンガ」が形成されたという考え方が通説になっているように思われるので⁽¹⁾、本論文はこれに反論を加えることを通して、上記の主題に迫ってみようとするものだからである。

- (1) それぞれニュアンスは若干異なるけれども、次のような著名な仏教学者がものされた著書あるいは論文の文章を一読されれば了解されるであろう。発表された年次にしたがって紹介する。同じ著者のものはもっとも早いものの次に掲げる。

「種々な名称で呼ばれる出家者、すなわち普行出家 (paribbājaka)、比丘 (bhikkhu)、沙門 (samaṇa)、行者 (yati)、遁世者 (saṃnyāsin) 等と呼ばれていた出家者たちが、宗教的修道と出家(無家庭)と遊行(無住所)とを共通な生活原則として、いわゆる一般社会の信施の食によって生きていた。……出家としての行法について、すなわち、一処無住の遊行を続けることや、雨期に一所に安住して生活することや、それらについての種々な外面的な行法等がほとんど共通のものたらざるを得なかった。」佐藤密雄『原始仏教教団の研究』(山喜房仏書林 1963.3.31) p.119

「仏陀時代においては、これらの各派の相互交渉は多く、また彼らの間には各派の別を示すような外形的な区別はなかった。その絶えざる遊行中には、各派の出家者がしばしば同一の休息所や会堂で相会し、談じあったのであった。」同上 p.122

「この出家遊行の生活は、ブツダ時代の他の宗教者の生活となんら異なった形式のものではなかった。」早島鏡正『初期仏教と社会生活』(岩波書店 1964.6.30) p.057

「本来比丘たちは遊行生活がたてまえであった。このことは、晩年の仏陀が老齡と病をおして、遊行生活をつづけたことから明らかである。このように遊行生活がたてまえであるが、しかし僧園や精舎ができる、僧園の管理や精舎の維持のために、その住処に常住する比丘ができるようになった。」平川彰『原始仏教の研究』（春秋社 1964.7.31）p.311

「かような比丘衆の団体生活の発展は、3ヶ月の一時的な定住地としての *āvāsa* と *ārāma* を、半永久的な定住地の性格へ変える種々の契機を与えることになった。

自由な遊行生活の古い理念は、比丘によって捨てられなかったが、他のセクトの乞食僧のように遊行者であることをやめ、安居の後の遊行期の終わりに（次の安居に）、再び前の *āvāsa* または *ārāma* に戻って居住する習慣となった。従って1つの *āvāsa* で安居の間共住したもの (*saṃāna-saṃvāsaka*) は、習慣的に他の *āvāsa* で共住した者 (*nānā-saṃvāsaka*) から区別された。かくして *āvāsa* に属する比丘の1団 (*āvāsika*) は、四方から集まった比丘の偶然的なグループではなくて、同じ *āvāsa* の慣習的な居住者の団体となった。このため、この *āvāsika* は単位を構成して *saṃgha* と呼ばれた。……

要するに遊行者から定住への生活へのこの移行は、緩慢ではあるが、初期の僧伽において形成された。」塚本啓祥『初期仏教教団史の研究』（山喜房仏書林 1966.3.31）pp.307～309

「出家者の居住の場所としての「住処」 (*āvāsa*) も「園」 (*ārāma*) も、安居（雨期の定住）の期間中の一時的な住処にすぎなかったが、やがて、この三ヶ月の「共住」（共同生活）は、出家者たちの団体生活を発展させていった。……かような出家者の団体生活の発展は、三ヶ月の一時的な定住地としての「住処」と「園」を、半永久的な定住地の性格へ変える種々の契機を与えることになった。

自由な遊行生活の古い理念は、出家者によって捨てられなかったが、他の教団の乞食者のように遊行者であることをやめ、……このため、かれらは単位を構成して *saṃgha* と呼ばれたのである。

かようにして、仏教やジャイナ教は、初期の遊行生活から、*saṃgha* や *gaṇa* における修行僧としての生活へと移行する傾向にあった。」塚本啓祥「仏教・ジャイナ教の発生基盤とその形成」（『東北大学文学部研究年報』32 1983.3.30）pp.029～030

「(*Sn.* v.628, *Dhp.* v.404; *Sn.* v.639, *Dhp.* v.415, *Sn.* 640, *Dhp.* v.416 やジャイナ教聖典の *Utt.* の句を紹介しないしは注記して) これは、バラモン教における遍歴行者 (*parivrājaka*, *saṃnyāsin*) の理想を受けているのであり、精舎ができる以前の釈尊や仏弟子たちもこのような生活をしていたのであり、仏教修行者の最初期の姿が示されている。」『原始仏教の成立』（「中村元選集」第12巻 1969.11.30）p.224、『原始仏教の成立』（「中村元選集 決定版」第14巻 1992.11.30）p.184

「最初期の仏教修行者たちは、遊行しつつ山窟や、森林や、樹下や、墓地など、人里を遠く離れた幽静な場所を求めて、瞑想の修行に専心していたことが知られている。仏教学者の研究によると、このような出家の形態は、仏教成立の比較的初期の段階で終わっただけで、出家者たちは、やがて村落近くに住み、さらには、在俗信徒が寄進建立した僧院に起居して、同行の出家者とともに、共同生活を送るようになる。仏教出家者の修行共同体は、「サンガ」 (*Saṅgha*) と呼ばれる。この語は、もともと「集い」を意味する普通名詞であったが、後に固有名詞化して、仏教出家修行者教団を指すようになった。」石井米雄『上座部仏教の政治社会学』（創文社 1975.6.20）pp.015～016

「そもそも釈尊は当時の反バラモン教的な沙門 (*Skt.śramaṇa*, *P.samaṇa*) の1人として、基本的に遊行生活を送りながら、修行し悟りサンガを作り、また一般信者を教化した。」森祖道『仏教・インド思想辞典』「遊行」の項（春秋社 1987.4.10）p.473

「仏教教団が拡大し、各地で精舎 (*vihāra* 「竹林精舎」「祇園精舎」など) が建てられるようになると、釈尊はじめ修行僧たちは、今までの遊行不定住生活から、精舎定住生活へ移行する

ようになった。」阿部慈園『頭陀の研究』（春秋社 2001.3.20）p.007

[3] 確かに釈尊が成道され、教化をはじめられた最初の数年間は僧院は建設されていなかったし、その主な活動の地は王舎城周辺であったから、山谷の洞窟や樹下に住することが多かったであろう⁽¹⁾。また僧院が建設された以降も、釈尊や主立った直弟子たちの多くは、絶えず遊行をされたであろうことは疑いえない。しかしながらそれらがジャイナ教徒やバラモン教の遍歴者（parivrājaka）の行う遍歴と同じような遊行であったかという疑問を感じざるを得ない。

またサンガは、僧院が建設されたことによって集団生活が行われるようになり、その結果自然形成的に成立したというような、無自覚的なものであったであろうか。サンガは仏教徒が皈依すべき「三宝」の1つとして把握され、この運営規則を集めた「律蔵」は、釈尊の教えを3つに分類した三蔵の、もし論蔵をここから除外するとすれば、経蔵と並ぶ二蔵の1つとして、釈尊の教えの主要な領域を占めているのであって、これらの重要欠くべからざる要素であるサンガが自然の成り行きによって、あるいは外的な要因に促されて形成されたとは到底考えられない。また律蔵の「犍度」のように整備された、サンガの運営規則のようなものが他の宗教に存在しない限り、もし彼らが形成していた集団がサンガと呼ばれることがあったとしても、仏教の「サンガ」をそれらと同様であったと認識することは誤りであるといわなければならないであろう。

さらに僧院における生活が仏道の修行に益のないものであり、ある意味では墮落であったとするなら、釈尊ははたしてその建設を認められたであろうか。とするならば、僧院建設の意味も改めて考えることが必要であろう。

- (1) 釈尊が活動された地域で洞窟のあるような山地があるのは、ガンジス河南岸のマガダの王舎城の近辺とアンガ地方のみである。

[4] 本論文は上記のような問題意識をもって、釈尊や仏弟子たちの生活の基本が遊行にあったのか定住にあったのか、僧院が何のために、いつごろ、どのような経緯で建設され、そしてサンガはどのような意図をもって、いつごろ、どのように形成されたのかということ論じようとするものである。

なお本稿では、日本語では同じく「遊行」と表現されても、後に形成された四住期の中の第4住期に相当するバラモンの遍歴期にある修行者（parivrājaka）やジャイナ教の修行者の行う「遍歴」と、釈尊や仏教の出家修行者の行う「遊行」とは異なると考えるので、この両者を厳密に区別するために pari-√vraj=vajati「歩く」「旅する」「到達する」に由来する語は「遍歴」と訳し、√car=carati「行く」「歩く」に由来する語、あるいはそれに類する語は「遊行」と訳することにする⁽¹⁾。したがって煩瑣になり恐縮であるが、これらに相当する部分にはすべてに原語を付すこととする。

またこのような翻訳部分のみでなく、著者自身の用語としても「遍歴」と「遊行」を使い分けることになるが、前者はただ独りで、明確な目的と目的地をもたない、一処不住の「旅」をいい、後者は必ずしも独りにこだわらず、目的と目的地が明確であって、また一定の場所に長居することも厭わない「旅」を意味させることをお断りしておきたい。言葉を換えてい

えば、前者は行雲流水のごとき「放浪」「漂泊」とでもいうべきであり、後者は「旅行」とでもいうべきであって、英語で言えば前者は wander, roam という語に相当し、後者は journey, travel に相当するというべきであろう。

- (1) 例えば中村元博士は *SN.001-003-001* の翻訳において、‘sato bhikkhu paribbaje’ が含まれる文章を「修行僧は気をつけながら遍歴すべきである」と訳され、*SN.009-004* (vol. I p.199) の冒頭の部分に含まれる ‘cārikaṃ pakkamimsu’ を、「遍歴に出かけた」と訳されているが、本稿では前者は「遍歴」と訳し、後者はこれを「遊行に出かけた」と訳すということである。